

内閣総理大臣賞受賞

「白壁」と「黒瓦」の統一イメージを通じた農家民宿を中心としたむらづくり

おくとしゆんらん さとじつこういいんかい
受賞者 奥能登春蘭の里実行委員会

いしかわけんほうすぐんのとちよう
(石川県鳳珠郡能登町)

■ 地域の沿革と概要

能登半島の北部に位置し、町の東側が日本海に面している能登町は、平成17年に能都町、柳田村、内浦町の2町1村が合併して誕生した町である。町の約8割が丘陵地となっているため、市街地や集落は、海岸部や山間部の川沿いを中心に形成されている。産業は農林水産業が主で、屈曲に富む地形を活かした良港に富んでいるのが特徴である。

また、本地域は自然の恵みへの感謝や神への信仰心が篤く、各地では、あえのこと・アマメハギ(いずれも重要無形民俗文化財指定)及びキリコ祭り等の民俗風習が今も受け継がれている。

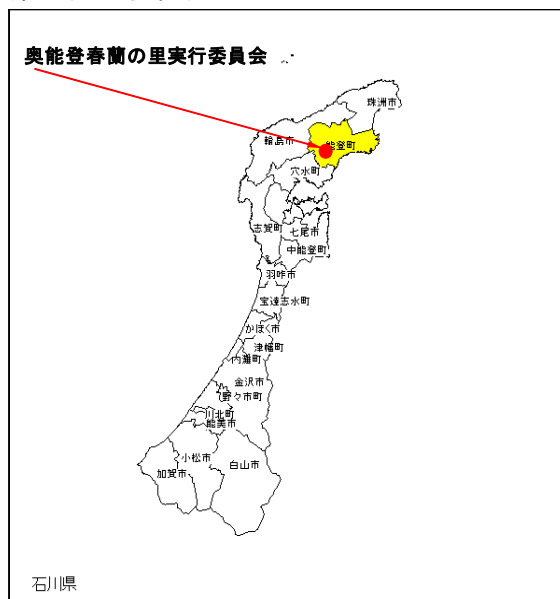
なお、能登町を含む能登半島地域は、地域の自然に見合った多様な農林水産業が連続と引き継がれていること、人の管理によって生物多様性を育む美しい里山・里海の景観が維持されていること、これらを保全する体制がシステムとして構築されていることが評価され、平成23年6月にFAO(国連食糧農業機関)より新潟県佐渡地域とともに日本で初めて世界農業遺産(GIAHS)に認定された地域である。

■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

宮地・鮭尾地区は、輪島市と穴水町に近い旧能都町の北西部に位置する中山間地域

第1図 位置図



第1表 地区の概要

事項	内容	
地区の規模	集落の集合体	
地区の性格	地縁的な集団等	
農家率 (内訳)		32.5%
	総世帯数	83戸
	農家数	27戸
販売農家数 (内訳)		26戸
	専業農家	4戸
	1種兼農家	3戸
	2種兼農家	19戸
主要作物 (農業産出額)		
農用地の状況 (内訳)	耕地計	19.5ha
	田	17.2ha
	畑	1.4ha
	樹園地	0.7ha
	耕地率	1.9%
	農家一戸当たり農用地面積	0.72ha

である。集落は標高200mの丘陵地の中を流れる山田川上流域に点在し、農地はほとんどが川沿いに存在しているため極めて狭小である。

年平均気温は約12℃、年間降水量は約2,000mmである。

交通条件は、国道249号線と県道26号線(珠洲道路)に連結する県道37号線が地区内を通っているが、能登町本庁舎のある宇出津まで約19km(30分)、県都金沢市までは約105km(1時間50分)の距離にある。平成15年には地域から約8kmの位置に能登空港が開港したことで、羽田空港から約1時間20分で到着することが可能となった。

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

旧能都町の人口は昭和35年をピークに減少を続け、減少率は石川県内でも上位となっていた。また高齢化率も高く、中でも宮地・鮭尾地区は町内でも最も高齢化率の高い地域となっていた。「あと10年も経つと農家が半分になる」と過疎化の進む集落の将来を懸念して、平成3年頃から会社員、建設業、林業等、業種の異なる有志7名が話し合いを続け、平成8年に「奥能登春蘭の里実行委員会」(以下「実行委員会」という。)を設立し、地域活性化に向けた活動を開始することとなった。

実行委員会の設立にあたっては、集落全体の合意形成から始めるよりも、「まずやれる者から始める」こととし、事業の発展に伴い、徐々に参加者、協力者が加わるという形で現在に至っている。また、山菜やきのこ採りが楽しめる山々、集落に流れる美しい川、雄大な自然の恵みがあふれている「本地域の魅力を活かす手はないか」ということに知恵を絞り、本地域の魅力を象徴する貴重な資源である“春蘭の花”に地域活性化の夢を託して「春蘭の里構想」を策定し、実現に向けて取り組むこととなった。



写真1 春蘭の里の皆さん



写真2 地域を象徴する春蘭の花

(2) むらづくりの推進体制

ア 当該集団等の組織体制、構成員の状況

現在、実行委員会は、34戸(うち農家27戸)、59名(うち農業者49名)で構成されている。構成員の平均年齢は63才、最年少は30才、最年長は83才となっている。

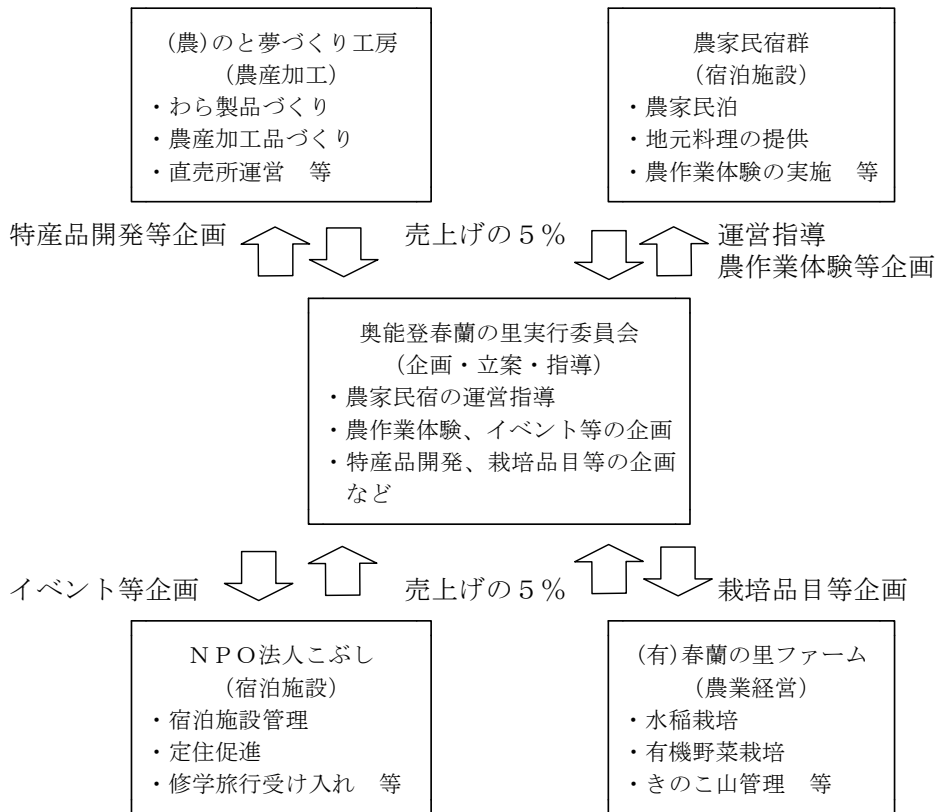
役員構成は、会長(代表)1名、副会長2名、委員9名、監事2名、事務局長(会計)1名、顧問1名となっている。

イ 当該集団等と連携してむらづくりを行う他の組織との関係

(農)のと夢づくり工房、農家民宿郡、NPO法人こぶし、(有)春蘭の里ファームの各組織は独立採算制であり、実行委員会は、農作業体験メニューの提示、特産品開発、イベント開催等の企画立案を行い、手数料として各組織の売り上げの5%を徴収し、通信費、事務費に充てている。

また、特区制度や補助事業等、行政や関係機関の支援を効率的に活用したむらづくりを展開する等、行政や関係機関とも良好な協力関係を構築している。

第2図 むらづくり推進体制図



■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

実行委員会の取組は、「春蘭の里構想」に基づき、自らが行動を起こて取り組んできた。

当初は、農林産物の高付加価値化を図り販売することから始まったが限界があることから、観光森林、観光農業等地域全体を農事公園とし、都会人が故郷と思うようなむらづくりに取り組んだ。

農家民宿第1号となった「春蘭の宿」開業にあたっては、こだわりを持つことで付加価値を付けることを目指した。

昔ながらの農家の佇まいを残すため、広間には自在かぎを吊した囲炉裏を整え、五右衛門風呂を設置した。また、受入れにあたっては「一日一客」とし、料理には山菜やきのこ等の山の幸をふんだんに用いるなど、本地域の伝統的な漬物や料理でもてなすこととした。加えて、様々な体験参加型のシステムを構築し、こだわりをもった農家民宿の取組を開始した。

1軒から始まった農家民宿は宮地・鮭尾地区のみならず、隣接する瑞穂地区にまで拡大し、現在30軒(200人/日受入)となり、修学旅行やインターンシップの受入れ等、地域全体での取組となっている。

2. 農業生産面における特徴

(1) 地域農産物の高付加価値化の取組

平成8年に「春蘭の里」の商標登録を取得し、米は、はぎ干し乾燥の「はぎ干し米」とし、同様に生産した酒米を地元の造り酒屋で製造した清酒「春蘭の里」として販売するとともに、かんじきや炭等の「木工品」の開発・販売も行っている。また、地元農産物を定期的に届ける取組として「春蘭の里会員制度」を開始した。平成9年には、山菜、林産物等の販売、米や野菜等の地元スーパー等との取引を開始した。

平成10年には、農林産物の生産と販売を行う(有)春蘭の里ファームを設立した。

国営農地開発地17haを共同購入し、山林へ地目変更の上、周辺の山林15haと合わせてきのこ山として整備を行い、民宿への食材提供や収穫体験等に活用している。

平成14年に惣菜と菓子それぞれの製造業許可を取得、平成16年には、(農)のと夢づくり工房を設立し、わら製品、農産加工品の製造、直売所の運営等を開始した。

平成18年には、手作りの培養土や腐葉土を野菜作りに活用し、J A S有機栽培の認証を受けている。

(2) 女性の参画と人材の育成

実行委員会の構成員のほぼ半数が女性であることから、立ち上げ当初から女性が運営



写真3 白壁と黒瓦の農家民宿



写真4 囲炉裏と地元食材にこだわった料理



写真5 手入れが行き届いたきのこ山

に参画してきた。農家民宿の運営についてはもちろんのこと、農産加工品の製造、直売所の運営等を行う(農)のと夢づくり工房においても、女性が運営の主力となっている。

また、人材育成についても県外への視察を積極的に行っているほか、グリーン・ツーリズム先進国であるドイツへ視察派遣等を行い、インストラクターの養成にも努めている。

さらに、平成19年から観光人材を育成する東京の専門学校からインターンシップを受け入れており、研修生は団体客の受入れ時や祭りの開催時等に本地域を訪れ、協力を行っている。平成21年にはインターンシップ研修生の中から1名が実行委員会の事務局員として就業している。

3. 生活・環境整備面における特徴

(1) 奥能登らしい景観の整備

平成15年に石川県が認定するグリーン・ツーリズム促進特区の対象地となったことを契機に、「春蘭の宿」での農家民宿経営のノウハウや助言等開業指向者の支援を行うとともに、外観は「白壁」と「黒瓦」に統一したイメージで奥能登らしい農家民宿群にこだわり、情緒豊かな雰囲気作りに重点を置いている。

また、修学旅行等の団体客を受け入れるため、廃校となった宮地小学校を体験・宿泊交流施設「こぶし」として整備した。同施設の運営に当たっては、安定した維持管理費用を確保するため、全10室をオーナー制で運営するとともに、管理にあたる地域内の高齢者には、健康管理の観点から非常に安い日当で協力をしてもらう等、ユニークな運営方法となっている。

(2) 里山資源の保全と活用

実行委員会では、本地域(里山)の魅力を象徴する貴重な資源である“春蘭の花”をシンボルとして各種の取組を行ってきた。このため、平成8年に春蘭の保全のための分布状況調査を実施するとともに、平成11年には県の試験研究に協力して、春蘭の産地化に取り組んだ。

さらに、平成22年には林野庁の森林総合利用推進事業に公募し、きのこや山菜等の発生状況や利活用方法等について調査研究を開始する等、里山資源の保全と活用に積極的に取り組んでいる。

(3) 多様な体験メニューによる都市農村交流

平成9年に第1号の農家民宿を開業して以来、農家民宿群や体験・宿泊交流施設「こぶし」等の整備をすすめて、一般都市住民だけでなく、修学旅行やインターンシップの受入れ等を行い、積極的な都市農村交流に取り組んできた。

小学校の宿泊体験を積極的に受け入れるために、農村の魅力を体感できる体験プログ

ラム（薪割り・稲刈り・はぎ干し・川遊び等）の企画立案を行っている。これらの取組の結果、平成20年には「子ども農山漁村交流プロジェクト」（総務省、文部科学省、農林水産省）の選定を受け、県都金沢市の小学生50人を受け入れることとなった。この取組では、薪割り・豆腐づくり・キリコ（能登地区祭りでの奉燈）の組み立てと担ぎ方等の体験を行い、子どもたちの健全心身を育む活動として、教育関係者や行政から高い評価を得ることとなった。

平成21年には、インターンシップで受け入れた東京の専門学校生の協力を得て、宮地地区にとって20年ぶりにキリコ祭りが復活し、地域の活性の一助となっている。

(4) 女性や高齢者の活躍

農家民宿開設者の男女がそれぞれ「おやじの会」、「おかみの会」を組織し、意見交換や料理研修を行う等、男女共同参画の実現に努めている。一方、料理等で供される野菜づくり、体験のわら草履づくり、民泊の楽しみである昔話、歴史、伝説等の語り部については、地域の高齢者依頼する等、体験・宿泊交流施設「こぶし」の維持管理とあわせて、積極的な高齢者の活用にも努めている。



写真6 田植え体験



写真7 キリコの体験